ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　吹き付ける風が、ねっとりと体にまとわり付く。とくんと波打つ冷たさに身を震わせつつも、明るさの薄れていく夕焼け空を、俺はただただ無言で見上げていた。

　目の前を流れる川のせせらぎが、辺りの雰囲気に合わせてだんだんと大きくなる。川の向こうの景色も、それに呼応するかの如く、明るく色付いてきた。どう表したらいいか分からない心も、それを聞いて、見ていると少しずつ形になってきたかもしれない。

　だが、それに素直に向き合えるかと聞かれれば、答えは否だ。

　俺は土手を背に川岸に寝転びながら、ボーッと数時間前のことを思い出していた。

　静寂の佇む空間で、俺達は暫くの間、それを守っていた。

　最初にそれを破ったのは、レイだ。

「……なんで？　なんでロランだけペナルティが？」

　その言葉は、今でも俺の頭の中に、まるで刺のように突き刺さって、ちくちくと鬱陶しい痛みを送っている。

　言葉の通りに取れば、俺だけ叱られた挙句に二本の刀を没収されて、他の三人はお咎め無し、ということなのだろう。

　レイの呟きに、俺を含めて誰も何も言葉を発さなかった。

「そりゃあ、まあ、ロランの行動は褒められたものじゃないかもしれないけど……それならそれで、その責任は私達にだって……」

　俺は、皆の顔がまともに見れなかった。

　それでも、震えている声を出すレイや、他の二人の顔がどうなっているのか容易に予想がついたのは、それだけ俺がやってしまった、ということなのだろう。

「ロラン……どうするの？」

　樹葉がそう聞いてきた。

　どう答えるわけでもなく、俺はそのまま後ろに倒れこむ。勢いよく倒れたせいで、ベッドがギシギシと悲鳴を上げた。

　何もやる気が起きなかったのだ。

「ちょっ……ロランっ？」

　流石に見かねたような声で樹葉が叫ぶが、俺は「うるさい、黙れ」とでも言わんばかりに、自分の顔を壁に向ける。

　実際、そう叫びたかった。

　大切な人から貰った物を奪われたからだろうか？　今はとにかく、一人にして欲しかったのだ。

　レイや詠も樹葉に同調するように俺に何か言っていたが、耳を塞いでいたわけでも無いのに、その声は不思議と俺には届かなかった。ただひたすらに、五月蝿いだけだった。

　やがて、こいつ等に対するイライラも積もってきて、

　ついに、俺の我慢も限界に達したのだろう。

　自分でも驚く程にガバッと起き上がると、キョトンとした三人を押し分けて、俺は自分の部屋を出た。

　玄関まで早足で向かい、靴を履いた時、慌てたようにレイが飛び出てきた。

　他の二人はまだ自分の行動に頭が追いついていないのか、俺の部屋から顔を出さない。

「ちょ……ちょっとっ？　どこ行くのよっ？」

「出ていく」

　それだけ言うと、俺は戸を蹴り飛ばして外に出た。

　同時に、ようやく他の二人も部屋から慌ただしく出てきた音が聞こえたが、俺は無視して、乱暴に戸を閉める。

扉の向こうから、何か叫ぶような声が聞こえ、次いでその扉が開いたが、俺は無視して飛び出していった。

　シェアルームマンションを出た後は、俺は行くあてもなく、ただフラフラと気の赴くままに歩いていた。服はマントは無いものの、一昨日トラースに向かった時のままだ。奇抜すぎるデザインじゃないお陰で、あまり変な目で見られないのは僥倖だろう。ただ、何も持たずに出てきてしまった上、朝から何も食べていないせいで、昼過ぎからずっと腹の虫が鳴り止まない。

　だが、空腹もあるところまでくると感じなくなってしまうらしい。代わりに今は、胃にムカムカとしたものが燻っていた。

　学校は勿論サボった。先生方の間では、早くも問題児に認定されたことだろう。

知ったことじゃないか。

どうせ、あんな風に出て行った後じゃ、大手を振って学校は歩けまい。あそこには『ワルキューレ』の人間が大勢いるのだ。

そこまで考えたところで、俺はホゥッと息を吐いた。

何だか、もうよく分からない。と言うか、俺は自分がこれから何をすればいいのか、何がしたいのかを知らないのだ。

そう言えば、今までですら、俺は『お姉様の役に立つ』と言っておきながら、具体的に何をどうすればいいのか、果たして分かっていたのであろうか？　ただ言われたこと、指示されたことしかやっていないのだ。これでは、『役に立っている』とは言わないだろう。

その証拠に、こうして出て行ってしまった事は、お姉様に対する重大な裏切り行為であり、俺がやりたかったこととは正反対のことである。

「何やってんだろうな、俺」

　呟いたところで、答えを返してくれる者はいない。その言葉だけが、ただ宙に舞って、儚く消えていった。

「あれ……友絆？」

　この後、どうしようか。そう思った所で、不意に声が掛かった。

　完全に油断していた俺は、肩をビクンと揺らして、慌てて声の聞こえた方に振り向く。そこには、俺のクラスメイトで、隣の席の男子。男性的な魅力の溢れるその顔は、今は口が半開きになっていて、目も見開いている。

　日ノ下海斗が、土手の上から俺を見下ろしていた。

「……よう」

　そう呟いたつもりだったが、果たしてちゃんとそう発音されていたかどうかは怪しい。

　海斗は、学校の制服を着ていて、スーパーの袋を引っさげていた。きっと、学校帰りにでも寄ったのだろう。

　日ノ下は、そのままの表情で俺の方に降りてくる。

「こんなところで、どうしたんだい？　風邪だって聞いていたけど……寝てなきゃ駄目じゃないか」

　近づいて来ながら、彼はそう言った。

　そこでふと、俺は妙な単語が聞こえたことに気が付く。眉を顰めて、恐る恐る何の事だか聞いてみると、

「えっ？　違うのっ？」

　と返ってきた。

　一体、どういうことだろう。

　訳が分からず、俺が首を傾げていると、その答えを日ノ下が言う。

「三組の月森さんが、先生に伝えていたのを見たんだけれど……君達二人って、どういう関係？」

　俺は「ただの幼馴染」とだけ答えると、ゆっくりと目を閉じた。どうやら、樹葉がそう先生に伝えていたらしい。全く、敵かもしれない相手にそんなシーンを見られるなど、一体彼女は何を考えているんだか……

　不思議と、俺にはもう関係無い、という考えは浮かばなかった。

　浮かんだのは、よく分からない、チクチクとした痛みを伴うモヤモヤ。

　これは一体、なんなのだろう？

「でも……こんなところで、本当にどうしたの？」

「あ……ああ。実はさ」

　頭の中がグルグルしていて、何と答えれば分からず、俺は勢いに任せて口を開く。

「家出してきたんだ。多分あいつ、俺に気を使って――」

「い……家出っ？」

　普段の……といっても、付き合いは短いが、小さな声からは想像出来ないような声で、日ノ下は叫ぶ。俺は、こいつに言ってしまった事を遅まきながら後悔した。そして同時に、何故か嫌な予感がする。

　次の日ノ下の一言が、その予感が正しい事を決定づけた。

「ならさ……うち来る？」

「……は？　なんだって？」

　思わず聞き返してしまった程に、この時の俺は同様していた。だが――

「いや、だから、今日はうちに泊まっていかない？　ほら、帰り辛いだろうし……」

　日ノ下の答えは変わらない。

「ちょ……ちょっと待て」

　さらに何かを付け加えようとする日ノ下を制止して、俺は慌てて、頭の中を整理し始めた。

　さて、どういうことだろう？　言葉通りに受け取るならば、日ノ下は俺を自分の家に泊めようとしている。確かに俺に行く当ては無いが、だからといって、この提案を二つ返事で受けるわけにもいかない。日ノ下はもしかすると、自分の敵かもしれないのだ。最悪、寝込みを襲われることも十分にありえるだろう。俺はすでに『ワルキューレ』を出て行った人間だが、それを日ノ下は絶対に知らない。

　いや……

　ここで俺は、その考えを改める。

「……じゃあ、すまない。泊めさせてくれ」

　襲ってきたなら襲ってきたで、その時に事情を説明すればいい。それによく考えてみれば、まだ俺が『ワルキューレ』の人間だったと気づかれたと断定するだけの根拠も無いのだ。あくまでも、俺が疑っているだけの段階。

　彼が一般人である可能性も残っているのだ。

寧ろ、俺がこのまま彷徨っている方が問題だろう。

　そう思って、俺は危険性を承知しつつも日ノ下の提案に乗った。

　日ノ下に連れてこられた家は、普通の一軒家だった。

　二階建てで、外壁は白く、畳四畳程度の広さの庭があり、庭の奥には犬小屋が見える。

　玄関に入ると、日ノ下の母親と思わしき人物が現れ、軽く挨拶を交わした。俺が急に泊まることになった旨を日ノ下が告げると、母親は一瞬驚いたような顔をしたが、俺の様子から事情を察したのだろう。快く、俺を家に泊める事を許可してくれた。

　俺は、キッチンに向かう日ノ下の母親の後ろ姿を、ボーッと見つめていた。

　この段階で、俺の日ノ下への疑いは、八割程晴れている。『チーム』に所属する奴が、血の繋がった家族と一緒に暮らすことなど、あまり無いからだ。主に、『研修所』の関係で。

俺みたいに、両親の顔を知らない子もそれなりの人数いるくらいだ。

彼の母親は、顔の作りの細かい所が日ノ下によく似ていて、とても用意された人間とは思えなかった。

とは言え、レアなケースも考えられなくもないので、残りの二割はきちんと疑っているのだが。

「どうしたの？」

「いや、何でも無い」

　そんな俺を不信に思ったのか、日ノ下は怪訝そうな顔で聞いてきたが、俺が首を横に振ってそう言うと、何かを悟ったような顔で、それ以上は何も聞いてこなかった。代わりに、俺の自分のスリッパを用意して、家にあがるよう促してくる。

　そして、俺を自分の部屋へと案内した。

　日ノ下の部屋は、中々に綺麗だった。俺の部屋も綺麗な方だが、それは必要最低限の物しか部屋に置かれてないからで、日ノ下の部屋が綺麗なのとは少し意味合いが違う。

　壁には三台も本棚があり、その内二台は本でぎっしりと埋まっていた。横に並べられた文庫本の上に、さらに本が積み上げられている始末である。残りの一つも、半分位が本で埋まっていた。

　全て漫画とラノベだったが、それでも圧巻の一言だろう。

「凄いな……」

「へへへ……子供の頃から集めてきたからね」

　思ったことが思わず口から漏れると、日ノ下は照れくさそうに鼻の下を擦った。

「えっと、晩ご飯にはまだ早いから、先お風呂に入る？」

「あ……ああ。じゃあ、頂くよ」

「背中、流そうか？」

「いや、いい」

　こいつは何を言っているんだ。

　そこでふと、俺は詠の顔が脳裏を過ぎった。

　そう言えば、あいつも似たようなことを最近言っていたっけ？

「えっと、着替えは後で持って行くから、気にせず入ってて。案内するよ」

　だが、そのすぐ後に発せられた日ノ下の言葉が、俺を記憶の世界から呼び戻す。俺は言われるがままに、日ノ下の言葉に頷き、彼の後についていった。

　風呂場は、俺の部屋の風呂場と同じくらいの広さがあり、俺は湯船に一人、口元までどっぷりと浸かっていた。

　お湯は心地よい温かさだが、何故か少し冷たい気もする。

　何故だろう？

　そこまで考えてから、俺は水中で細く息を吐いた。息は気泡になり、水面で弱々しく弾ける。

　本当は、分かっていた。どうしてこんな気持ちになるのか、気がついているのだ。

　俺は、今更になって家出してきた事を後悔しているのである。

「友絆。着替え、ここに置いておくよ」

　日ノ下の言葉が、脱衣所の方から聞こえてきた。俺は適当に返事をすると、湯船から上がり、シャワーのからお湯を出す。

　ローズの香りのするボディーソープを少しタオルに乗せて泡立てると、体を洗い始めた。

　他人の家で風呂に入るなど、俺には初めての経験だ。

「……我ながら、随分とアホな事をしたもんだな」

　自分の嘲笑の声が、まるで他人の声のように聞こえてしまう。客観的に見れば、本当にその通りなのだろう。

　俺は、ハアッと溜息を吐いた。